

写真(竣工 上重 廻縁・高欄 南東面)を見ると修復直後は、外壁が薄黄土色であることがわかる。結論から言うと、この色は土佐漆喰を使用しているからである。土佐漆喰とは、塩焼き石灰に発酵ワラスサを混ぜ、さらに三ヶ月発酵させたものである。薄黄土色の原因はこの発酵ワラスサの色であるが、半年程度経てば白色に変化してゆく。



工事中 土佐漆喰製造工場

写真(工事中 土佐漆喰製造工場)を見ると、床に二つの筒状穴があるが、石灰石を焼いているところである。右側にある黒い石状のものは、コークスであり、これとさらに塩を入れて高温で焼いている。ちなみに筒状穴は約7mの深さとなっており、焼成された生石灰は下から取り出され、塩焼き石灰は発酵ワラスサと融合しながら土佐漆喰へと加工されてゆく。



工事中 土佐漆喰上塗り

外壁は下重北側の一部を除き、全て既存土佐漆喰を剥がし、シーラー処理後に砂漆喰塗りを施し、その上に新たに土佐漆喰を仕上げた。ただし、劣化が著しく壁土から修理する箇所は下塗りに半田を用いて修理をした。写真(工事中 土佐漆喰上塗り)は下重南側の上塗り中であるが、左官職人が横一列に並び、この層の一面を上から下へ

一気に上塗りしているところである。5人の職人による息の合った巧みな技であると言えよう。ちなみに今回、外壁・唐破風・軒天などに土佐漆喰を使用した理由は、30年前に本天守閣を復元した時にも使用していたからである。通常の本漆喰とは異なり、土佐漆喰は糊(つものまたなど)を混入せず、発酵ワラスサによる本体そのものの粘着製を保ち、さらに塩焼き石灰の粒子は絡み合った板状になっており、土佐漆喰は本漆喰に比べて耐久性に優れているということで今回も採用した。



工事中 隅扱首継手仮墨付

写真(工事中 隅扱首継手仮墨付)この部分は上重廻縁・高欄を支える重要な構造材である。写真ではわかりにくいですが著しい劣化状況であり、台持ち継手を採用し、取替材による修理を採用した。



工事中 上重屋根破風尻 瓦取外し

上重屋根の南東破風尻からの雨漏り箇所は、原因解明の上、同様納まりの他3箇所も修理した。また、亀裂の入った鳥衾瓦も5箇所取替とした。

この度、修復工事を無事終えることが出来たのも、掛川市民、事業関係者のおかげであり、心より感謝申し上げます。